第十講　韻文の鑑賞①

Step 1

一　次の俳句を読んで、あとの問いに答えなさい。

A　葉桜の中の無数の空さわぐ　　篠原梵
B　大空に伸び傾ける冬木かな　　高浜虚子
C　夕暮は雲に埋まり春祭　　廣瀬直人
D　さえざえと雪後の天の怒濤かな　　加藤楸邨
E　天の川大風の底明らかに　　佐野青陽人
F　空をゆく一とかたまりの花吹雪　　高野素十

注1　澄み切ってはっきりしている様子。
注2　大きな波。

1　体言止めを用いながら、春の空の下で動きのある様子を描き、空間の広がりと美しさを詠んでいる俳句はどれか。A～Fの中から一つ選びなさい。

2　冬の空を背景に、目の前で繰り返される激しい動きとともに高まった感動を、切れ字を用いて表現している俳句はどれか。A～Fの中から一つ選びなさい。

3　次の文章は、A～Fの中のある俳句の鑑賞文である。この鑑賞文を読んで、あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

作者はこの句で、風の吹く中で見上げた空がまたたきながら揺れ動いているように感じたことを、「Ⅰ」と表現している。実際には、空は動かないのだが、「Ⅰ」という表現がこの句を強く印象づけている。

そして、空を見上げた時、目の前にある対象物のみずみずしさと、その奥にある空のⅡとをとらえただけではなく、Ⅲ様子も感じられて、空の美しさが鮮明にとらえられた句となっている。

(1)　Ⅰにあてはまる最も適当な言葉を、その俳句の中から**四字**でそのまま書き抜きなさい。

(2)　Ⅱ、Ⅲにあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア　Ⅱ　明るさ　Ⅲ　葉の間から見える空が重なり合う
イ　Ⅱ　静けさ　Ⅲ　花びらが舞い散る空が広々としている
ウ　Ⅱ　果てしなさ　Ⅲ　遠くまで見渡せる空が澄んでいる
エ　Ⅱ　さわやかさ　Ⅲ　絶えず雲が流れる空が波乱を暗示する
オ　Ⅱ　心細さ　Ⅲ　夕焼け色に染まる空が次第に暮れる

【福島県】

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私の詩友・川崎洋（ひろし）さんの作品を取り上げます。川崎さんの「夜」という作品の中に、こういう二行があります。

橙（だいだい）色の月めがけて
すぽんと海を脱ぐ魚

これは月夜に魚が海中から海面へ㋐躍り出た様子ですが、私は①〈すぽんと海を脱ぐ魚〉という表現がたまらなく好きです。〈海を脱ぐ〉と表現されているので、海中の魚がふだんは素肌で巨大な海を着込んでいることがわかり、魚が全身を撓（たわ）めて海を脱ぐときの、しなやかなひねりと力強さまで感じられます。

これが仮に〈海面に魚が躍り出た〉という表現だったら、どうでしょう？〈海を脱ぐ〉という表現から感じられるような、魚と海との親しい関係や魚の生動感が全く伝わってきません。［②］のです。

海の魚がふだんは海を着ているという羨（うらや）ましいようなことを〈すぽんと海を脱ぐ魚〉は一瞬、鮮やかに気付かせてくれるのではないでしょうか。

川崎さんの作品をもう一つ挙げます。「どうかして」という作品の中に、こういう㋑箇所があります。

鳥
お前が雲に消え入るように
僕がお前に
＿＿＿＿＿＿＿＿

すっと入ってしまうやり方は
ないかしら
そして
僕自身も気付かずに
身体の重みを風に乗せるコツを
僕の筋肉と筋肉の間に置けないかしら

A

ご注目いただきたいのは終わりの二行です。〈身体の重みを風に乗せるコツ〉を、僕の筋肉と筋肉の間に置けないものだろうか。もしそれが出来れば、鳥のように空を飛ぶことが出来るわけだなあ、飛んでみたいなあ、というわけです。

私は以前、十年間ほど高校生の投稿詩を読んだことがありますが、その作品の中で〈鳥のように自由に空を飛びたい〉という言葉に㋒頻繁に出会いました。人間の気持ちの中に飛翔願望があり、特に若い人の間にその欲求の強いことはわかりますが、〈鳥のように空を飛びたい〉だけでは、あまりにも有りふれていて切実感が伝わってきません。

そこで、詩の引用箇所をもう一度ご注目いただきましょう。ここに〈空を飛びたい〉という言葉はありませんが、実質は飛翔願望そのものであること。しかし、空を飛びたいと言う前に、③飛ぶことに必要な手続きをあれこれと考えているところに、なんとも言えないユーモアと謙虚さを感じます。

〈空を飛びたい〉という願望を仮に他人から聞かされた場合、私達は〈ああそうですか、どうぞお好きなように〉とでも言うほかはありませんが、この詩の場合のように〈身体の重みを風に乗せるコツを／僕の筋肉と筋肉の間に置けないかしら〉と持ちかけられた場合は、それが幻想とはわかっていても、私達は川崎さんと一緒になって、飛ぶことを考えてみたくなるような、そんな気分になってしまいます。ここが④この詩の魅力なのです。

詩を通じて私達は、ああしたい、こうしたいという思いや望みを訴えるだけに終始しがちで、自分本位になりやすいものですが、訴えを聞く人が一緒になって考えてくれるような、丁寧な話の持ちかけかたが大事なのだということを、このすばらしい作品から感じ取ってい

ただきたいものです。

（吉野　弘「酔生夢詩」より）

Step 2

1　本文中の次の漢字の読み方を書きなさい。

㋐ 躍り出た　[　　]り出た

㋑ 箇所　[　　]

㋒ 頻繁　[　　]

Step 2

2 ① 〈すぽんと海を脱ぐ魚〉という表現とあるが、この表現から感じられることについて本文中で筆者が述べている内容を、次のようにまとめた。[a]、[b]に入ることばをそれぞれ本文中から抜き出しなさい。

・海中の魚がふだんは素肌で巨大な海を着込んでいるという羨ましいようなことに気付き、[a]が感じられる。
・魚が全身を撓めて海を脱ぐときの、しなやかなひねりと力強さといった[b]まで感じられる。

a [　　]

b [　　]

Step 2

3 ② には、詩の表現についての筆者の考えが入る。次のうち、入れるのに最も適しているものはどれか。一つ選び、記号を書きなさい。

ア この仮定が詩の表現を変化させるために必要な仮定だと思う
イ この硬さが詩の表現を知的なものにすることもあると思う
ウ この違いが詩の表現と普通の文章表現との違いだと思う
エ この比較が詩の表現の偶然性をあきらかにすると思う

Step 3

4 ③飛ぶことに必要な手続きをあれこれと考えているとあるが、「飛ぶことに必要な手続き」とはどのようなことか。A中のことばを使って**四十字程度**で書きなさい。

Step 3

5　④この詩の魅力とあるが、次のうち、この詩の魅力について本文で述べられていることがらと内容が合うものはどれか。一つ選び、記号を書きなさい。

ア　この詩は、強い飛翔願望をもっている若い人への共感を表そうとしているが、空を飛びたいという欲求を表現するのに有りふれたことばを使っていないので、想像力をかきたてる作品であること。

イ　この詩は、ユーモアを感じさせる表現が多く使われていて空を飛ぶことができるような気分になるが、実質は飛翔願望ではなく、その願望の奥にある自由へのあこがれを表している作品であること。

ウ　この詩は、鳥のように自由に空を飛びたいという飛翔願望を他人に聞かせるのではなく、空を飛んでいる鳥に話を持ちかけるように表現されているところに、謙虚さが感じられる作品であること。

エ　この詩は、人間の気持ちの中にある飛翔願望を自分本位に訴えるのではなく、丁寧な話の持ちかけかたをしているので、飛ぶことを一緒になって考えてみようという気を起こさせる作品であること。

6 本文では、筆者は二つの詩の魅力を紹介している。次は、「鉄棒」という詩と、その詩の魅力を紹介する文章である。[I]に入ることばを「鉄棒」という詩の中から抜き出しなさい。また、[Ⅱ]に入れるのに最も適していることばをア〜エから一つ選び、記号を書きなさい。

僕は地平線に飛びつく
僅(わずか)に指さきが引つかかつた
僕は世界にぶら下(さが)つた
筋肉だけが僕の頼みだ
僕は赤くなる　僕は収縮する
足が上(あが)つてゆく
おお　僕は何処(どこ)へ行く
大きく世界が一回転して
僕が上になる
高くからの俯瞰(ふかん)
ああ　両肩に柔軟な雲

（村野四郎「体操詩集」より）

（注）　俯瞰＝高い所から全体を見ること。

【紹介する文章】

この詩に描かれているのは鉄棒の逆上がり運動の様子です。ここではまず、鉄棒を［Ⅰ］と表現しています。さらに、顔を真っ赤にして体を引き上げ、鉄棒の上に静止するまでの様子を〈大きく世界が一回転して〉ということばを使って表現しています。そして、この詩全体からは、空間的な広がりと［Ⅱ］とがよく伝わってきます。

ア　逆上がり運動の難しさ　　イ　「僕」の動きの力強さ
ウ　大空の雲のやわらかさ　　エ　「世界」全体の複雑さ

Ⅰ［　　　　］

Ⅱ［　　］

【大阪府】

〈Note〉

第十講　韻文の鑑賞①

Step 1

一

解答

1、F　2、D　3、(1)空さわぐ　(2)ア

解説

1、名詞で終わる表現技巧の体言止めが使われているのは、CとF。Fの「花吹雪」が、「春の空の下」での動きや、「空間の広がりと美しさ」を表している。

2、冬の句はBとDで、どちらも「かな」という切れ字が使われている。Dの「怒濤」が、「目の前で繰り返される激しい動き」を表している。

3、(1)「風の吹く中で見上げた空が…ているように感じたこと」に着目して、鑑賞文はAの句について述べたものだということをおさえる。この句で、空が揺れ動く様子を表現している言葉を抜き出す。(2)葉桜のすき間から、空の光がちらちらと輝いて見える様子をおさえる。

Step 2・3

二

解答

1、㋐おど(り出た)　㋑かしょ　㋒ひんぱん　2、a、魚と海との親しい関係　b、魚の生動感　3、ウ　4、鳥の中にすっと入って、身体の重みを風に乗せるコツを自分の筋肉と筋肉の間に置くこと。(41字)(同意可)　5、エ　6、Ⅰ、地平線　Ⅱ、イ

解説

2、「海面に魚が躍り出た」という表現からは「全く伝わってきません」とされていることがらに着目し、aは海との関係、bは身体の動きを表すことばをおさえる。
3、「すぽんと海を脱ぐ魚」という表現と、「海面に魚が躍り出た」という表現の違いから、詩の表現の特徴を示している。
4、「僕がお前に／すっと入ってしまうやり方」を考え、次に風に乗ることを考えている。
5、直前の「ここ」は、「身体の重みを…置けないかしら」と持ちかけられると、「川崎さんと一緒になって…気分になって」しまうことを指している。最終段落で、詩では「訴えを聞く人が…丁寧な話の持ちかけかたが大事」であるとまとめている。
6、Ⅰ、最初に「飛びつく」ものである。Ⅱ、「僕は世界にぶら下つた」「僕は赤くなる」「僕は収縮する」「大きく世界が一回転して／僕が上になる」という「僕」の姿の描写から伝わるものを考える。